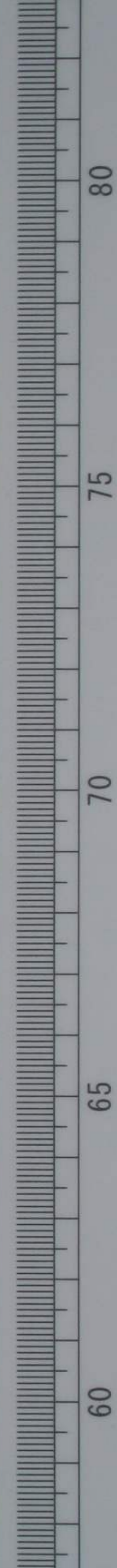
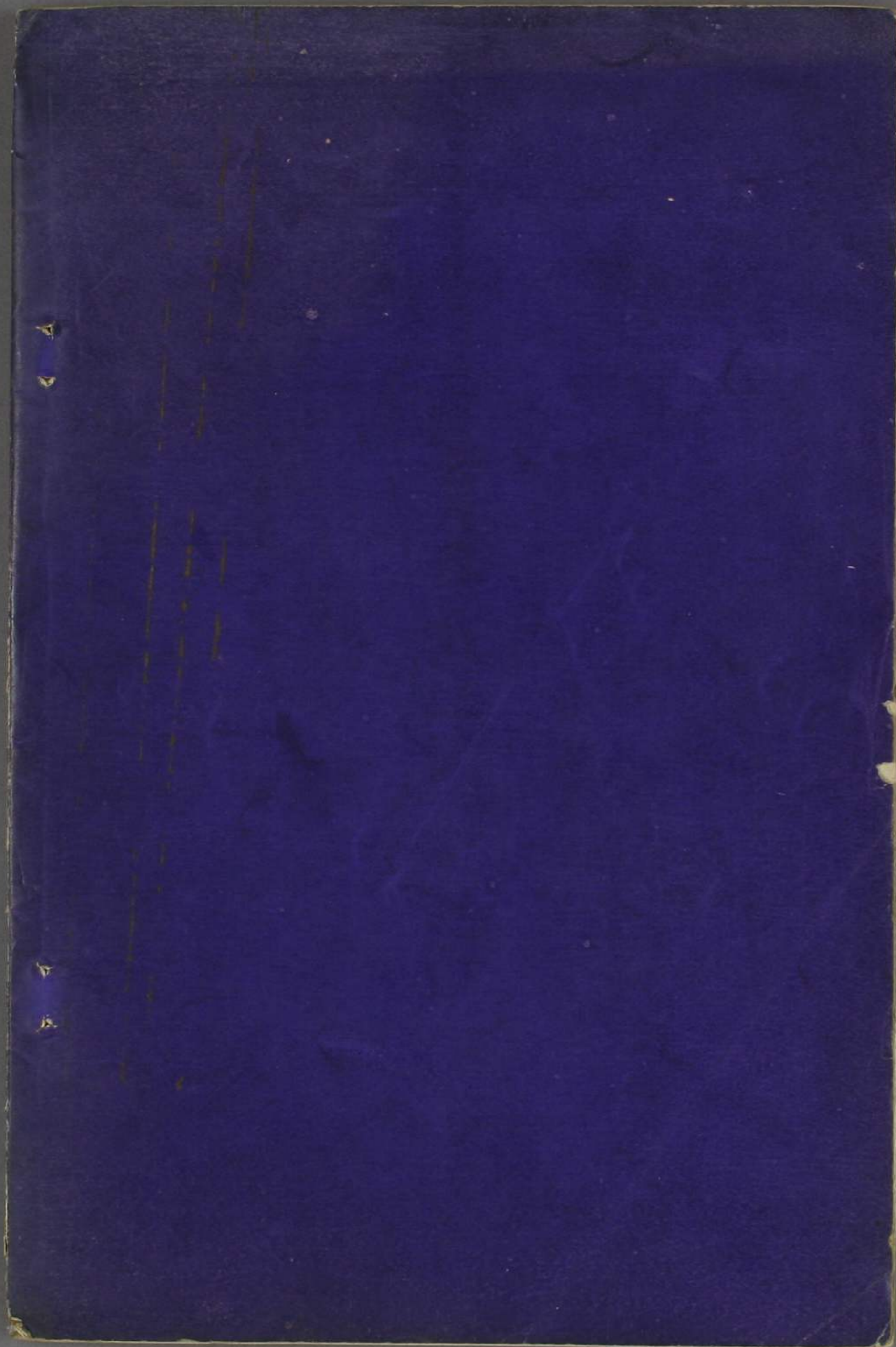


重盛

高安三郎作







内大臣左大將平重盛
 太政入道淨海
 四位少將維盛
 越前守資盛
 右大將宗盛
 三位中將知盛
 頭中將重衡
 大納言時忠
 主馬判官盛國
 肥後守貞能
 筑後守家貞
 飛彈守景家
 難波次郎經遠

詩中之人

重盛の父
 重盛の嫡男
 重盛の次男
 重盛の弟
 同
 同
 淨海の小舅
 平家の侍
 同
 同
 同
 同
 同

妹尾太郎兼康
 關白藤原基房
 新大納言成親
 丹波少將成經
 西光
 俊寛
 静憲法印
 式部大輔章綱
 平判官康頼
 多田藏人行綱
 竹王
 文覺法師
 源頼朝

平家の侍

重盛の小舅

成親の子

院の御藏

法勝寺執行

俊寛の臣

侍 綾 師 麻

從 子 人 子

重盛の妻成親の妹

成親の妻

成親の娘

綾子の侍女

佛 祇 祇

女 王

白 祇 白
拍 王 拍
子 の 子
妹 妹

平家源家の侍關白の供人町人女房上臈翁草刈童鬼

第一 段

其一 法住寺殿 細殿

女房八人出つ

一 女 きのふの雨に洗はれて
 二 女 空は朝より雲もなく
 三 女 けふの御賀を知り顔に
 四 女 御庭の花も咲き揃ひ
 五 女 作りし花と別ちあく
 六 女 吹く春風にやうくと
 七 女 散るをそれぞと知る有様
 八 女 氣も浮々と致しまする
 一 女 そりや其筈しや何よりも四位少將維盛様が青海波を遊ばす由
 二 女 殿上一の好い男

三女 はんに小松様の殿達は揃ひも揃ふて好い御きりやう
 四女 先づ左大將様のお立派さ
 五女 お名の通り松の様な
 六女 いやあのお優しい所松の木には見えませぬ
 七女 それに引きかへ右大將様あちらが花あらこちらは瓜
 八女 あれでもほんの御兄弟か
 一女 まぎれぬは少將様御兩親の好い所一つにしたおん姿
 二女 はんにこなたにくらべては外のお方は皆深山木
 三女 深山木の中の楊梅
 四女 濡るとも花の陰に隠れん
 五女 そりや誰も同じ事したがもう先を越されました
 六女 そりやまた誰に
 七女 新大納言様の息女綾子どの
 八女 綾子殿なら我君様か御心かけたまひ近くにお召しあさるゝはづ

一女 サアそれ故に面白いどうある事であらうなあ
 二女 あれ〜樂が始まりまする
 三女 どれ早う行て
 一同 見ませうわいなあ

入る

其二 同 庭前

三位中將知盛頭中將重衡其外垣代として
 少將維盛少將成經舞人として

出つ

青海波を舞ふ

其三 同 休息所

綾姫侍従出つ

侍従 御執心の青海波どう〜お目にかけたななんでもたんと御褒美を戴
 かねはなりませぬ
 綾子 見るばかりに來はせぬわいなあ

侍従

それい何のぬかりませう先程申して置きましたおつ、けここへ見えませう

六

維盛出つ

侍従

それおいで遊はした人の來ぬ間にサアお傍へ

維盛

いや某に御用はあるまい

綾子

エイ

侍従

口説どころじやござりませぬ積る話をサアちやつと

維盛

いや、今に某おはは顔をお顔を拜む事さへもかおはぬようになるであらう

綾子

アレあん事おつしやるわいなあ

侍従

今の事でござりまする誰がお耳へ入れたやら

維盛

此身は凡人及ひもなきはこやの花言葉かけるも恐れあり

侍従

まだおつしやるオ、そうじやわたしが居ては却てむつかし一寸そこま
で参ります跡ですななどだうなりと——まかし人目の關近くお氣をお

付け遊いませ

入る

維盛

たまの逢瀬じやに濟まぬ顔はどうしてそ

綾子

今のお言葉が氣にかゝつて

維盛

そりやそきたより某こそ口では輕ういふものゝ心の内の波や風ちと推
量したがよい

綾子

推量せよとは妾のいふ事たどへ玉の臺でも何の外へまゐりませうそれ
にまだ御存じなく今の様におつしやる故妾は悲しうござりまする

維盛

そりや知らぬではなけれども外ならぬ出世故

綾子

思かなふた其上に何の出世がござりませう

維盛

そりやまた眞實

綾子

ハイ

新大納言成親出つ

成親

維盛殿維盛殿や姫もこゝにか唯獨り何として

綾子

いえあの侍従は今をこまで

七

侍従出つ

侍従

これはく殿様には

成親

供に來て何所へ參つた入らざる所に長居は無用早う館へ歸るがよかる

侍従

エイまわ折角

成親

なんと

侍従

いえなにお先へお姫様には

綾子

そんなら父上

成親

オ、

綾子

あなた様にも

維盛

いつれ其内いやなに御免下され

成親

二人入る

成親

さて維盛殿けふの舞は見事く女院よりも數々の御下されものありし

由お目出たい事でござる

維盛

おはづかしうござりまする

成親

お目出たいは足下はかりか御親父は左大將宗盛殿は中納言より數輩の

長老を飛越えて右大將とは古來稀なりいや御盛事じやてのう

成親出つ

成親

父上これにおはせしか唯今何か右大將殿がお尋ねでござりました

成親

右大將とは——宗盛殿か馴れね故今云ふ下から早間違ふと致したわい

維盛

某はお先へ御免成親殿にも御ゆるりと

成親

其内お目にかゝるでござらう

維盛入る

成親

宗盛が何の用

宗盛出つ

宗盛

成親卿にはこれに居られしかイヤ大分貴殿も過されたさ五十の御賀の

事なれば五十杯を傾けんと引受けく飲む中につい忘れて數知れすい

ヤ好い心持でござるのう

成親

して御用の趣は

宗盛

某此度昇進の喜に大酒宴を催さんと用意大概整ひました近日改め申入
れます必ずおいで下されい

成親

それは結構でござるのう

宗盛

新に得たる馬もござる成経殿にも御一所に
有り難う存じまする

成経

して御用は

宗盛

用と申すは即ち此事

成親

あのこれしきの

宗盛

エ

成親

いや結構でござるわい

宗盛

是非々々おいで下されい酔ふた酔ふたこりや太刀も重たうなつてまる
つたわい

よろめきなから入る

西光出つ

西光

成親殿

成親

西光殿か

西光

あれでも右大将

二人

ウツハ、、、

成親

いや彼ばかりではござらぬわい一族の叙位幾十人

西光

安藝守より催のひまに入道は太政大臣隨身兵仗を賜つて牛車輦車の宣
旨を蒙り乗りあから出入なす

成親

西八條の榮華の様此殿よりも過ぎたるべし

西光

胸悪き俗物共烏帽子衣紋に至るまで六波羅様とて學ぶどか

成親

はては凡人にためしなき中宮までまゐらせたり

西光

それはさて置き我君より御内意ありし貴殿の息女いかなさる、御所
存なるか

成親

願てもなき御仰せ早速差上げ申すでござらう

西光

せめてものおん仕合しかし中宮には早御懷妊の御様子どか

成親 エそりやまことでござるかか

西光 いや確かには存し申さぬ

成親 ヲム

女房出つ

女房 大納言様少將様お召しにござりまする

成經 左様でござるかそれでは直様

成親 オ、參るでござろう

女房入る

成親西光に然らば後刻

成經 御意得申さん

西光黙禮 二人入る

西光

一寸おどかしてやつたら心配顔のあのおかしさはかない事を頼みにして運の向くのを待て居るとは新大納言も話せぬわいしかし今の誰もかも皆六波羅にこびへつらひ門前市をなす有様かれこれ云ふだけましで

あろう

女房出つ

女房 西光様あかたもお召しでござりまする

西光 ヲム今宵は飲て飲み明そうか

其四 大炊御門

平家の侍禿童大勢雜具を荷ふて出つ

續いて町人二人追かけて出つ

一町 そりやあんまりでござります

二町 どうぞ御りやうけんなされて下さりませ

一侍 何があんまり

二侍 何をりやうけん

一禿 其方共こそ不敵にも

二禿 六波羅の御門前に

三禿 伊豫讃岐左右の大將書きこめて
 四禿 慾の方にい一の人かなと書て札を立てをつたぞ
 一町 何の私が左様の事
 二町 夢にも覺えいござりませぬ
 一禿 然ら何故札の前へ
 二禿 立並て笑ひをつた
 一町 エイ
 三侍 家財を取上げるは當り前じや
 四侍 そればかりではない其方共も
 五侍 引くゝつて連れて行く
 一町 エイ此上にまだくゝられますのか
 二町 なさけない事じやなあ
 六侍 こまこと云はさす引くゝれ

町人逃ける 侍追ふ

竹王出つ 侍二人を倒す

一侍 ヤア邪魔ひろくは何奴じや
 竹王 それがしより汝等こそ餘りといへは非道の振舞町人共の家具を奪ひあ
 二侍 まつさへ捕へんとは強盜の上の強盜め
 一禿 だまれこやつ
 二禿 此直垂が目に見えぬか
 一禿 此禿が目に見えぬか
 三侍 六波羅殿を恐れぬか
 竹王 オ、六波羅の者共とは固より知る六波羅ならて切り禿直垂着たる強盜
 二侍 あらんや
 一侍 エイこやつから引くゝれ

争ふ町人逃げ去る 竹王遂に捕はれ一同入る
 あなたより關白の車供人出つ
 こなたより平資盛若侍馬にて出つ

關白の前驅一 下に

同 二 下に

同 三 こりや何者じや乗打するは

資盛等かまはす乗たまゝ過く

同 一 無禮者

同 二 引下せ

資盛等馬より引下さる 争ふ 資盛の從者多く打たる 關白の一行過ぎ行く

資盛 いやじやゝ此様に馬より引づり下した上衣服まで破りをつた

一侍 多勢に無勢是非なくも

二侍 此耻辱は受けましたが

三侍 此返報は急度近日

四侍 殿様に言上あし

五侍 殿様より大殿様に

資盛 そらじや祖父様に申上げ仕返しせねはならぬわい

月出つ

一侍 月なき中にてまだ仕合せ

二侍 見られぬ内に早御歸館

三侍 いさ御乗馬を

資盛 オ、皆も乗れ乗たまゝも一度こゝを通つて歸らう

皆乗る 下されたる處を乗て過ぎ行く

其五 重盛館 寢殿

重盛靜坐

月明——暫くして雲月を蔽ふ

重盛 満つる時は欠くる時露るゝと思へは雲蔽ふ曇りなき時いくはくそ數ふ
れは四十年見る此月は幾たひか欠けては満つる満ては欠く我々の一族
の欠く事なくて年々に尤ち満ちて今十分公卿となるもの十六人殿上人

三十余人諸國の受領六十余人榮華の端にあつかるものいくはくといふ
數を知らずまして我々兄弟にてためし少なき左右の大將妹は后と仰か
れまだ年若き倅等まで四位五位をかたしけなふし父上は太政大臣六十
余州の秋津國三十州は一族の知行の國とは恐ろしや余りに張れば破れ
易し破るゝ時やいかならん高く昇れり落るも深し落る時やいかならん
破るゝまで人は悟らす昇る時は落つるを思はず飽くまで貪ほる慾念に
四海の寶寄せ集め夜も夜ならず晝も夢綺羅の花にも秋來ると知らずあ
たりを憚からず君を侮どり民を苦しめ日にくゝつゝのる奢の沙汰拂へと
積る村雲に月も光を蔽はるゝ澄む甲斐もなき身はひとつア今宵もまた
寝られぬわい

麻子資盛出つ

麻子

我つま氣がゝりな事が出来ました

重盛

おん身にも氣がゝりが

麻子

さいお聞きなされませ今の事資盛が大炊御門の邊とやらで關白様に逢

重盛

いたしましたらその時に理不盡な此子をいじめ供も皆馬より引つり下した
と歸て來ての物語

忝に關白殿下に出合ふて馬より皆々下されしさてはこなたより下りざ
りしかヤイ資盛子細を申せ

資盛答へすうつむく

重盛

供には誰を連れ居りし其者共をこれへ呼へ

麻子手を打つ 侍女出つ

麻子

供の者をこれへ呼へや

女房

かしこまりました

入る

侍二人出つ

二人

お召しにござりまするか

重盛

其方共か資盛に今日は従ひまゐりしは

二人

左様にござりまする

重盛

今聞けは關白殿下に出逢ひしといふ事じやか詳しく様子を語り聞せよ

一侍 御免なされて下さりませ
 重盛 先つ詫ひては譯が分らぬ様子はとうじや
 二侍 申譯がござりませぬ
 重盛 云はねは尙々分らぬわい
 一侍 我々共が附添ひながら
 二侍 輕からぬ御耻辱
 重盛 耻辱とはいかなる耻辱
 一侍 御乗馬より無体にも
 重盛 引下されしを耻辱を得たと其方共は申すのか
 二人 申譯がござりませぬ
 重盛 うりや得たのではない與へたのじや
 皆 エイ
 重盛 我ど我身に與へたのじや
 資盛 何とおつしやりませ

重盛

こりや資盛うちや重盛が子でないか日頃の言葉何と聞く關白殿下に出

麻子

重盛

何の事じや可愛相に此子を叱るとはさかさな
 こりや兩人余の者にも云傳へよ耻辱とは他人より故なく得らるゝもの
 ならず我より道を破るこり第一の耻辱なれ此度も我ど我に耻辱を與へ
 て誰を恨む——かゝる事より稍もすれは思ひの外の大事となる者——
 よくく、汝等心得て再たひしてはならぬぞよ

二人

重盛

皆

重盛

恐れ入りましてござりまする
 翌は子か關白殿下の御館を訪ふて詫言せん
 エそりやまたあんまり
 まだ其方共には分らぬか

皆黙

立て立てもはや休息せよ彼の事にて疲れつらん

資盛侍入る

重盛 我子までが此有様

麻子 まだお休みなされませぬか

重盛 此頃は夜が寝られぬおん身は先へ休むがよい

麻子 ろんなら我つま御免なされて下さりませ

重盛 無言うなづく 麻子入る

笛の音

重盛 庭に下り徘徊す

侍従 忍て出つ 月明

重盛 見とめて誰じや誰じや

侍従 ハイ——私でござりまする

重盛 侍従か——何用おつて此夜深に

侍従 それは——オ、ううじや姫君様の御願掛御代參を致しまする

重盛 代參といそりやどこへ

侍従 エ

重盛 變つた處へ行くのじやのう

侍従 つまる

重盛 行け行け

侍従 ハッ

重盛 いや待て待てまて姫の病氣いどうじや

侍従 なにお姫様の御病氣とい

重盛 されば病であるまいか院の御所よりお召しあるに今に於て參られぬは

侍従 はんに御病氣御病氣でござりまするいやもうお悪いとばつかりでいつ

重盛 までも御本復はまわ覺束のうござりまする

重盛 それは困つた事じやのう——まかしこゝに藥がある取り次てのくりや

侍従 らぬか
うれいまわ有り難い定めて粹なイヤ酸いお薬でござりませう

重盛 こゝは庭先こちらへおじや

侍従 御免なされて下さりませ

重盛上る 侍従も上る

重盛

苦き樂は本意ならねど飲まさにやならぬ二人の身の上

侍従

エイ

重盛

よつく聞け其方も見聞きせん我一門の日頃の振舞余の人はいふに及ばず一院にも内々は目醒ましうねはす由然るに御心かけたまふ姫をまらせぬのみならず我子と縁を結ひなは御憎しみはいかばかり表に出たし玉はすども御心惱ます勿体なさ二人が末も恐ろしくまして父成親卿何とて承引あるべきか我ども知りあからいかで申し出さるべき由なき縁を繋がんより早う思ひあきらめて姫にも御所へまゐるよう其方より勸めてくれ

侍従

うれじやといふてお二人の

重盛

ろりや我ども知らいでなるうか知て聞かれぬ胸の内我身の事を忍ぶより子の事忍ぶい十倍の苦しきといよも知るまじかならず我を恨ますに一院兩家二人の身あなたこなたを思ひやりあきらめるやう傳へてく

れ

侍従

お言葉返すに返されぬ御尤なれん仰れ姫様も御辛抱遊さねはなりませぬ——アひよんお事になりましたなあ

重盛

人の見ぬ間に早ういにや

侍従

左様なれば殿様

重盛

オ、姫の事を頼むぞよ

侍従

こりやはんの御病氣にあらねいよろしうござりまする

入る

維盛出て跡を見送る

重盛

維盛か

維盛

ハッ

重盛

これへ來やれ

維盛

ハッ(近づく)

雲月を蔽ふ

重盛

また月は隠れたのう

維盛

左様にござりまする

重盛

月も少しは曇つた方が晴れたより好いてはないか

維盛

何とれつしやります

重盛

足らぬ處に哀れいある貪はれはどていかて飽かんや戀も遂げぬが戀の

奥

維盛

エ

重盛

先の笛は其方か今宵は殊に哀れであつた

鴈一羽鳴て過く

維盛

あれ〜鴈か唯一羽

重盛

つれに後れて飛て行く

維盛

さも戀しげに鳴きまする

重盛

親か子か

維盛

妻か夫か

重盛

どうか逢はして

維盛

エ

重盛

やりたいものじやのう

月明

重盛

背燭共憐深夜月踏花同惜少年春

入る

第二段

其一 淨海館 寢殿

淨海祇王祇女其外侍女大勢

大納言時忠難波經遠妹尾兼康其外侍臣大勢

列坐 酒宴

祇王 春を飾りて梅櫻

祇女 桃も李も咲き揃ひ

時忠 上には物云ふ花も咲く

經遠 花と花との其中に

兼康 かく包まれて居るといふも

時忠 相國の皆御蔭

經遠 大納言殿の仰の通り

兼康 ね蔭にて此の如く

一侍 ね盃をいだいいては

二侍 これより上の

侍一同 事はござらぬ

淨海 小さな事を云ひをるわいこれしきに何の満足此淨海は足らぬ足らぬ

兼康 何が御不足でござりまする

淨海 何もかも不足じやわい美女も日々同じ顔見て居てはいやになるこれよ

淨海 り外に美女はないか酒肴にも飽き果てたこれより外に美味はあいか此

淨海 館も氣に入らぬ此京も狭いであいかこれより外に好き處其方共は心付

淨海 かぬか

經遠 亦に此京を狭いとは

淨海 見よ山に圍まれて鼻を打つようじやわい山を後に前に海四季様々

淨海 の眺めある處に住て見たいものじや

時忠 ろれでい攝津福原の御所へね移りなされませい

淨海 あれへ行かぬこゝへ不便いつう都も諸共に

兼康

エ

淨海

まかし小松が何と思ふか

時忠

いや今の時誰あつて相國に逆らひませうや見渡す限り草も木も靡き從ふ其陰に源氏の晝の螢より光を失ひ藤原の花の族も色さめて見る影もなき其有様いや此一門でなき者の人非人ではござらぬか

經遠

人非人とは面白い

皆

ワハ、、、

侍臣出つ

侍

申上げます右大將様越前守様御入來にござりまする

入る

宗盛資盛出つ

宗盛

父上

資盛

祖父様

二人

御機嫌如何でござりまする

淨海

オ、兩人共よく參つた

時忠

これいゝ宗盛殿此間ね話の御祝宴のまだでござるか

宗盛

されい何かと暇取りまして今以て埒明かす其内ね招き申すでござろう

時忠

其節には御秘藏の熊野とやら申す美女

宗盛

エ

時忠

いや名馬を拜見致したいな

宗盛

ハ、、、いかにもれ目にかけるでござろう

時忠

急度れ見せ下さるな

宗盛

ハ、、、

淨海

いつに變らぬ氣樂な奴じやうれに引かへ資盛は何故左様にしほれ居る

資盛

祖父様悔やしうござりまする

淨海

悔やしいとほうりや何事

資盛

きのふ耻辱を受けました

淨海

耻辱耻辱とは何奴に

資盛

關白殿下にござりまする

淨海

關白にもあれ誰にもあれ此淨海を憚からず淨海の孫に耻辱奇怪あり奇
怪なり其時の様子はとうじや

資盛

きのふ大炊御門の邊にて不圖出合ひましたれは左右かく我等を馬より
下し供の者を打擲して

淨海

憎つくき奴原重盛に語りしか

資盛

父上に申せしに却て我等が叱られました

宗盛

例の兄貴の道立してけふの殿下に詫言すると自身に館へ行かれたげな
また重盛か入らざる謙遊いや此儘に捨置ては我勢を落すに似たりヤア

淨海

經遠兼康汝等これよりいつくにも殿下の通行待受けて前驅隨身嫌ひ
なく皆鬚を切拂ひ資盛か耻雪け

二人

かしこまりましてござりまする

入る

淨海

よしなき事にて氣色が悪るいろれ女共歌へ歌へ

侍女

ハア

筑後守家貞出づ

家貞

申上げます佛と申す白拍子推參致しましてござりまする

宗盛

なに佛

時忠

それこそ加賀より出てたるものにて並ひなき舞の上手世にもてはやさ
るゝものでござる

家貞

未だ御當家へ召されぬは本意なき心地にござりますれば何とそ一たひ
お目見得をお許しある様願ひまするとかなたにひかへ居りまする

淨海

いやなめ過ぎた女じやわい呼ひもせぬに推參するとはかなはぬ事じや
いなしてしまへ

家貞

ハ、

祇王

まあお待ち遊はしませ折角参りましたものすげのういなすも不憫とい
ひ殊に妾か妬にて止めた様に思はれるもはつかしうござりますれば一
寸なりとも御目見得をお許しなされて下さりませ

淨海

フムしかしきりやうはどうじやな

家貞

ハ彼も中々優れ居ります

浄海

呼びもせぬに参るとは大分變つた奴と見える逢つてやろう呼出せ

家貞

すりやれ目通り致させませうか

時忠

御意の變らぬ内早々これへ

家貞

ハア

時忠

花ある處は呼ばずして蝶鳥の來るとひとしく求めずして美人寄るこれ

も偏へに御威勢

宗盛

まかしどんな者であるか

家貞佛出つ

家貞

お召しに従ひ自拍子佛召連れましてござりまする

時忠

これの中々尤物じやな

佛

お叱りもなくお目通りお許しなされて下さりましておうれしう存します

する

浄海

フムま一つ歌ふて見い

佛

ぶしつけながら仰に従ひ

君をはじめて見る時の

千代も經ぬへし姫小松

御前の池ある龜か岡に

鶴こそむれ居て遊ぶなれ

浄海

イヤ中々これはよい聲じや舞も定めてよいであらう一さしそれにて舞

て見せい

佛

いつれも御免下さりませ

徳是北辰椿葉影再改

尊猶南面松花色十廻

舞ふ

よしさらは心のまゝにつらかれよ

さなきは人の忘れかたきに

浄海

こいつ予か心をいひをるわい——早くこゝへ参れ参れ

佛

それでは余り恐れ多うござりまする

浄海

エイちらしをるな立て手を取る今より我側離さぬぞ

佛

これは思ひもよりませぬ唯お目通りはかり願ひましたにそれでは第一

浄海

祇王様へ私が濟みませぬ

浄海

何といふても返さぬわい但し祇王に憚るなら祇王をこれより出してし

浄海

まうそ

祇王

エイ

浄海

其方こそ出て行け

佛

それでは尙々濟みませぬかうお目通り出来ましたも皆祇王様のお取り

浄海

なしそれにあなたを出させましておめく残て居られませうか

浄海

それでは祇王そちも舞へ佛の舞とくらへて見ん

浄海

エイ涙はさらいじや早く舞へ

祇王

ハイ

祇王泣く

佛もむかしは凡夫なり

我等も遂には佛なり

いつれも佛性具せる身を

へたつる心のうたてさよ

立上る 不意に狂風 襖皆倒る 侍女騒く

浄海

ヤア何を騒く舞へ歌へ

風益々荒る 物の音

浄海

舞はぬか舞はぬかあせ歌はぬ風鳴らは鼓を打て風騒かは聲張上げよ四

海を握る此浄海月も日も我爲に光りかやく其中に逆らひ立てする不

禮の風風如きに興醒す歌ひ騒きて風打消せ

風益々荒る 屋根板散り来る

浄海

エイ云甲斐なき奴原かな汝等舞へすは資盛舞へ

資盛

ハッ

長生殿には

時忠

イヤ風吹かす

不老門には秋もなし

立て舞ふ吹倒さる

長押の折飛ひ來る 淨海柳つ

其二 堀川

風の音

經遠兼康其外侍大勢出つ

兼康

もはや通行に間もあるまい汝等の内一人遠見せよ

一侍

ハッ

入る

經遠

車近かは関を作り一度にかゝつて誰彼の用捨せず鬘切れ

一同

ハア

一侍出つ

一侍

唯今それへ見えまする

經遠

忍へ

一同ひそむ

關白の車供人出つ

風の音 関の聲 侍現はる

前驅

ヤア何者じや此狼藉

經遠

誰でもない六波羅の御内の者

兼康

さのふの恨返さんどてこゝにて待受けをつたるそ

前驅

ヤアまたしても不禮の振舞

經遠

それ者共

かゝる 争ふ 風の音 關白の従者多く鬘を切らる

經遠隨身一の鬘を切りこれは汝の鬘ならず主の鬘として切るそそれ者共笑へ笑

へ

侍一同

ウハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

入る

關白基房半切られたる簾をかゝけて出つ

一隨身 我君様

二隨身 言語に断えたる此振舞

一同 口惜しうござりまする

基房無言に見つめる

西光出つ

基房西光と顔見合せ車

一隨身 轆も折られ御牛も倒されましてござりまする

基房涙を拂ひ徒歩して一行入る

西光見送り不道も最早極つたわい

其三 淨海館 祇王の部屋

祇王祇女出つ

祇女 姉様

祇王 妹

祇女 ひよんな事になりましたなわ

祇王 きのおまでもけさまでも並ぶ者なき御寵愛里の母まで何やかや御贈り

物絶えすして知らぬ人にも羨まれ名前まで真似られしに手の裏返すお

ん心出て行けどは情けない人に顔が合はされぬ

祇女 わたしとてもお蔭にて兎や角人にもてはやされたにこれから何とある

事を心細うござんすはいあわ

祇王 をなたは元より此身をはたよりになさる母様がさそやお嘆きなさるで

あろうこりや何としたりよかろうなわ

家貞出つ

家貞 迷惑をお使を仰付られましてござる

祇王 これは、筑後守様してお使の趣は

家貞 されは甚申難いか御上意なれば是非がござらぬ拙者をお恨み下さるな

杖殿の仰に直様これより御退出お里へお歸りなさる様仰付けでござ

祇女泣く

祇王

まだ日も高うござりますれば人に顔を見られまするも心苦しうござり
ますればせめて暮までお情にてお待ちなされて下さりませ

家貞

御尤にはござれども例の殿の性急にて片時も猶豫する事の仰は是非
がござらぬて早々退出の御用意あるべし拙者は仰せ傳へるまでまたお
目にかゝるでござろう 入る

祇女

あんまりじやあんまりじや姉様あんまりではござんせぬか

祇王

いや〜日頃の御氣質では御寵愛もきつい代りお嫌ひどなつたらはお
側へも行かれぬわいなあくどう願は、尚々御機嫌損ねるはかりそれよ
りは跡見苦しうさい様に部屋片付けて下りませう

祇女

そんならお下りなされまするか

祇王

入る

宗盛出つ

宗盛

オ、祇女一人か丁度よい此間の返事はどうじや

祇女

これは〜若殿様あなたにお願いかござんすわいなあ

宗盛

そちの事なら何でも聞こう

祇女

外の事ではござんせぬ姉様のけふの不首尾どうぞあなたから大殿様へ
堪忍まで下さるやう願ふて見て下さんせいなあ

宗盛

其事あらそりやいかぬわのむつかしい父上に逆ふて怒られよ、りだま
つて居るが遙かまし殊に此度の佛とやらは余程お氣に入つた様子外の
者はあかぬ〜

祇女

左様でもござんせうがそこをも一度あかたから

宗盛

困つた事をいふ奴じやなあ

祇王出つ

祇王

いや〜妹もう云やんかどなたにお願い申しても何の甲斐
そなたしやあきらめましたわいなあ

宗盛

そんならこれからお行きやるか

祇王

仰に従ひ下りまする

宗盛

まかし祇女は残て居や

祇女

いえくゝわたしも下りまする姉様にお別れ申し何の獨り残りませう

宗盛

そなたは子か館へおじや

祇女

いえくゝ一所に下ります

宗盛

こいつ困つた奴じやなあ

侍女出つ

侍女

大殿様のお召しでござりまする

宗盛

そんなら祇王祇女も最一度思案して返事しや

祇女

もうお返事ござんせぬ

宗盛

まだ片意地事いひをるわい

侍女ど入る

祇王

いやなに妹折角殿様の仰せじやないかうあたは何でお受けしやらぬ

祇女

お前に別れてまた忽ちお前の様を憂き目に逢ふわわたしやいやでござんすわいなあ

祇王

これはよう氣が付きませたはかないものは女子の身盛りといふても春

の花玉の臺に活けられても移るに間もない顔形移らぬ先に早飽かれ増す花の目の前にて耻かゝされて捨てられてまだ此上にどの様を憂き目に逢ふも計られぬわたしや心をきめましたこれより遠い山里へ厄どもあつて身を隠し日陰に萎むつもりじやわいなあ

祇女

うんならわたしも御一所に

祇王

いえくゝそなたはまだ若い

祇女

御前どて二十一

祇王

そなたは十九か

祇女

姉様

祇王

妹ア短かい榮えであつたなあ

佛出つ

祇王祇女見て立上る

佛

まわくゝ待て下さんせいなあ

祇王

わたしに用はござんすまいわたしもお前に用はない

佛 いえく、一寸下に居て

祇王 萌え出つるも枯るゝも同じ野邊の草

佛 エイ

いつれか秋に逢はではつへき——妹おじや

姉妹入る

佛

お腹の立つの御尤もわんしどて御寵愛取らうとて参りはせぬ有り様は
羨ましくせめてお目見得など願はうと思て來たら思ひの外かふいふ事
になつた故余りの事に落付かぬ——第一氣の毒でならぬわいさあ今聞
けは尼になり山里へおいでとやらうんな氣にもなるであるきのふまで
は春の夢忽ち醒めてけふの秋

風の音

ア物を思へは風も染むほんに同じ野邊の草祇王様の枯れて行く此身は
これから萌え出る盛りいつまで續くやらいつれか秋に逢つてはつへ
き此身にも秋風が——ア心細うなつて來たさあ

侍女出つ

侍女 殿様が召しまする

佛 何やら心か進まぬわいなあ

侍女 早うおいでなされませぬと御機嫌が損しますぞえ 入る

佛 少しの事で浮き沈み丸木ふまへて海渡る手かけ目かけの身の苦しさ

侍女出つ

侍女 何をしておいでなされますもう御立腹でござります

佛 てもむつかしいお殿様

淨海出つ

淨海 祇王よりは情こわくまゝにあらぬも長うはいやじや

佛 妾は何やら心持が

淨海 エイぐづぐづ云はすと來いといふに

無理に引張て入る

其四 同寢殿

侍人四人出つ

一侍 何とえらい風ではないが

二侍 塀垣はいふに及はず家の倒れたも何百軒

三侍 鳥獸より人までも死なのは數知れず

四侍 どうぞ早く止めはよいが

一侍 風もこわいが風よりも御前様が拙者はこわい

二侍 風はたつた一日じやが御前様は毎日毎晩

三侍 吹通してたまらぬく

皆 ヲハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

五侍出つ

五侍 唯今小松内大臣様御入來でござりまするそ

一侍 然らば拙者は此由を大奥へお取次

入る

二侍 拙者等はお出迎ひ

三侍 致すでござろう

重盛出つ

二侍 唯今これへ御前様

三侍 お出ましに

四侍 ござりまする

淨海資盛時忠侍臣出つ

重盛 今日と思ひがけなき大風にござりまする父上には御機嫌いかゞお伺ひ

淨海 申し上げまする

凶事にはいつとても早速に見舞てくれるうれしいそよ

重盛 參上致す道すから家屋の破損人馬の死傷計り知られぬ其中に此お館は

何事の障りもあきは先つ大慶にござりまする資盛うちやこれへ參り居
つたか

資盛うつむく

灘波經遠妹尾兼康出つ

二人

立歸りましてござりまする

浄海

どうじや首尾よくやり遂げたか

二人

ハッ(重盛を見てためらふ)

重盛

いつれへそち等は参りしな

二人

ハッ(ためらふ)

重盛

云ひ得ぬはいふかし、資盛其方存し居るか

資盛

ハッ(ためらふ)

浄海

いやなに重盛こりやこうじやきのふ資盛に耻辱を與へし關白殿に酬ひ

重盛

んど其爲めにやつたのじや

二人

こはけしからぬ御振舞えて〜いかなる事せしそ

浄海

仰の通り計らひました

二人

ろりや皆髻切り取つたか

重盛

御意にござりまする
淺ましき者共かなこりや兩人たどへ父上いかようなる仰せ付けこれあ

資盛

るども何故我に知らせさりしそ第一資盛こそ不届なれきのふの戒早背

浄海

きかよりの事を仕出えて父上の御名を立つ今より其方勘當じや

重盛

エイ
これ〜重盛日頃に似ぬ短氣の所置勘當とはふびんでないか

二人

いや〜これの小事でござらぬ殿下へ對し君へ對し決して此儘免され

重盛

ませぬ早々伊勢へ下るへし經遠兼康其方共も目通りかなわぬ

資盛

恐れ入りましてござりまする
資盛も早く行かぬか

浄海

左様ござれの父上様祖父様にも御機嫌よう

資盛

オ、すぐに詫ひて呼ひもどすぞ

侍女

よろしうお願い申しまする
侍女出つ

浄海

申上げます祇王様此歌をお殘し遊ハし唯今お下りなされました
エイ左様な事跡で云はぬか

宗盛 ヤア
 一侍 いつくともかく
 二侍 笑ひ聲
 宗盛 もしや天狗の
 侍皆 ヤア
 一侍 何にもせよ聲のしたる方を尋ねて参りませう
 重盛 いや待て待てありや風じや
 侍皆 エイ
 重盛 天津風の言葉じやわい

第三段

其一 成親館

侍従其他侍女出つ

一女 あんど皆さんお目出たい事ではござんせぬか
 二女 さいなこんな時有り合した私共も仕合せでござんす
 侍従 アこれくお目出たいお目出たいと余り仰山に云ひしやんすな
 一女 それでもこんなお目出たい事がたんどあるものかい
 二女 女子の身には此上もかい立身出世じやござんせぬか
 侍従 立身やら出世やら何やらさつぱり分らぬわい
 一女 何を云はしやんすお殿様もついにない御機嫌で立つたり居たりしてお
 いで遊いす
 二女 御臺様も御自身に何やかや遊はす故雨が降らねはよいわいな
 一女 けふ降てなるものか

侍従 いや降て降て降て通したらよい氣味であらうわいあ

二女 そうしや降ても大事ないどうせ今宵の御儀式は

侍従 エイ何の事じやいま〜しい降るなど照るなどしたがよい

一女 侍従様は法界客氣か

二女 こりやおかしい

二人 アハ、、、

侍従 エイ氣色の悪るいあつちへ行こ

二人 アハ、、、

師人出つ

師人 皆の者は何して居やるまだ用意は出来ぬそやあちらへ行て手傳やいの

う

二人 かしこまりました

入る

侍従 姫はどこにまだこしらへは出来ぬかえ

侍従 ハイまだてござりまする

師人 何をして居やるやら姫々

綾姫出つ

綾姫 何の御用でござりまする

師人 ほんにまだ何もせずそなたは何としやつたのじやけふの事を忘れてか

綾子 ようよう存じて居りまする

師人 それに何で支度はしやらぬ

綾子答へす

師人 此間から籠てはかり花か咲ても見にも行かす浮かぬ顔は悪るいのかと尋ねてもちがふといふそれにやつぱり其有様はんにどうしやつたのじや

侍従 それが御病氣でござりまする此間小松様イヤあのおんの薬で尙々重

うではあいな御本復あされました

師人 そんなら早う化粧しや父上もお尋ねじやお叱りあき内よいかや

侍従 かしこまりました私が篤くり御意見なに御身じまいいたしませう

師人
侍従

そんならそなたを頼みました
お姫様——申しお姫様なんぼお考へ遊あそびにしても外に思案はござりませぬぞえ

入る

綾子

そんならどうしたらよいのじやえ

侍従

さあどうしたらどてお湯を召し

綾子

エ

侍従

お身じまいを遊あそびして

綾子

そしてどこえ行くのじやえ

侍従

こゝからズット南の方

綾子

小松様も南の方

侍従

も少し南の御所でござんす

綾子

エイ何の事じや聞いて居れば御所々々ともう云やんなそなたまでが同じ様にもうよい〜今までの相談したがこれからは何も云やせぬそなたも云ふてたもんなや

侍従

これはきついお腹立そうおつしやれば跡が出ぬしかしまあお聞き遊をしませ殿様はあの通り何でもかでもと思召す頼みにした小松様は事分けてのお諭しに取付く處がござりませぬそれにくよく〜思召し行くまいと遊はしても追付お迎が見えたならどうしてお遁れなされますもうさつばりとあきらめて御用意をなされませこれ申しお姫様——お姫様そなたは覺えがないかしてようそんな事云やるのう

綾子
侍従

それはまんざらわたし〜やどて覺えのない事もござんせぬがかう詰つていどうも仕様が

綾子

もうよいもう何もいふてたもんなもうそなたを頼みはせぬ

侍従

そうして何となされます

綾子泣く

侍従

こりや困つた事じやなあ——エイもう仕様がなそんならかう遊はしませ一寸一筆お書き遊はし私か一走り小松様へ持て参り若殿様にこつそりと御手渡し致しまして暮を相圖にお館を

綾子

エ

侍従さゝやく

綾子

よういふてたもつたそんならこれから直に行て

侍従

さあ一筆遊はしませ紙筆を渡す

綾子

手がふるふてどうも書かれぬそなた代りにいふてたも

侍従

氣の弱いな方じやなあよろしうござりますそんならわたしがよい様に
申しませう悟られぬ様ね氣をわつけ遊ばしませ
入る

成親師人出つ

成親

姫なんじやまだ支度もせずこりや一体どうしたのじや

師人

先程も申しましたに

成親

申しましたに所じやない女共女共

侍女出つ

侍女

何御用でござりまする

成親

それ早う姫の支度

綾子

いえあの侍従が歸りまして

成親

侍従はいつれへ参つたな

綾子

エイ

成親

侍従の爲に待たれようかそれ早うおにをぐづ

姫侍女と入る

師人

せくほど何も出来ませぬ

成親

心にかゝるゆうべの夢鴨の社と覺しきに参詣なしてぬかつく所神殿の

成親

屏の中より誰れとも知れず聲高に櫻花鴨の川風恨むなよ散るをはえこ

成親

を止めさりけれ今に覺ゆる歌の言葉此程右大將を所望して八幡に大般

成親

若を讀ませし時山鳩來りて食ひ合ふ果して宗盛に取られたり彼といひ

成親出づ

成親

成經か院の様子は如何じやな

成經

あなたは用意整ひました暮ると直に迎のお使者おつかはしになります
れは其おつもりにて御用意を

成親

こなたは今に整はぬ女子共のぐづぐづと何をするやら埒明かぬまかし兼ての望かき喜びはしい事ではいか

成經

お目出たう存じまする

成親

暮るといふても間もあるまい姫はまだか女共寢殿の掃除はどうじやこりや自身に見廻らねはならぬわい

成經

拙者が見分して参りませう

入る

師人出つ

成親

まだぐづぐづ御身も衣裳を着替ぬか

師人

あなたもまだでござりまする

成親

ウム人の事にかまやるな

成經出つ

成經

もうお迎が見えました

成親

もう見えたかそれお出迎エイ衣裳じやそれ早う致さぬかい

三人入る

綾子出つ

綾子

侍従は何をして居やるもうお迎が見えたといふにエイ遅いどうしたのじや胸さわぎがして来たわいあわ

侍女出つ

侍女

姫君様御臺様が召しまする

綾子

エイもうとつと辛氣な事

侍女

さあお越し遊はしませ

綾子

今直に行くわいなあ

師人出つ

師人

さあお使者は見えたぞえそなたもあれへ一寸出や

綾子

お跡から参りまする

師人

遅う参つては失禮じや妾と一所にさあおじやいのう

無理に手を引て侍女と入る

侍従出つ

侍従　もうお迎ひが見えた様子お姫様——お姫様——どれへおいで遊ばした
——もうお出まし遊ばしたか——お姫様

綾子出つ

侍従(実當り)お姫様かさあ早う

侍女出つ

侍女　姫君様こりやどこへ

侍従　どこへでもよいわいなあ

侍女　何を云はんすお召しじやわいなあ

侍従　あつちも外にお待ちじやわいなあ　姫の手を引て入る

侍女　何の事じや外にお待ち——どうやら怪しい今の様子——そうじや此由

入る

御臺様へ
師人侍女出つ

師人　それ——部屋をさがして見や

侍女　どこにもお見えなされませぬ

師人　こりや困つた事じやなあ

成親出つ

成親探し廻りたはけめたはけめそれ故に申し付けた何故番をしをらなんだそれ

庭の隅扉の外皆寄てさがせさがせ

侍女　ハア　入る

成親　いやあのお使者に知れぬ様ひそかに致せと申付けい誰も居ぬかそれ師

人早う行て申付けぬか

師人入る

成親出つ

成親　父上意外な事が起りましたあ

成親　お使者には知れまいな

成親　それいまだ知れませぬが時刻さればと促かされます

成親　エイ困つた奴どこへ参つた

成親　もしや外に契約の

成親 左様な事があるものか

成親 散りある短冊を取上げ、雲井より吹來る風のはけしくて

成親 エイ此中に歌どころか

成親 いえ、いはれありげの歌

成親 なんじや、涙の露の置きまざるかな

成親 こりやたしかに妹の筆さては此事望まさりしか

成親 エイ憎むへき女子じやなわ短冊を裂く

師人出つ

師人 所々方々たづねましたがどこにも姿は見えませぬ

成親 それ見たか兼てよりよく、申含めよと云付けて置たるにかような事を仕出すは全く御身が悪るいからじや

師人 なんぞといふと妾はかり悪るい様におつしやれと姫に思のある事はあ

成親 なたもよう御存じ、や

成親 うりやまた誰を

師人 小松様の嫡子維盛殿

成親 エ

師人 外に待つといふたどあれは一所に逃げたのであるらうわいなわ

成親 娘まで盗み取り人の榮をさまたくる非義非道の平家の振舞恨に恨は重

つたよしこれより院の御所へ参り一々君に訴へくれん

其二 維盛綾姫道行

ものゝふも弓矢を捨て、二十年いくさよはひに引きかへて琵琶やようでう笙和琴駒にむちうち行く先も地主の櫻や嵐山もみちかざして日を送る大宮人となりしより顔も形も鴨川の水に洗はれ照り光る源氏の君の幾たりとあるか中にも取り分けてゆうにやさしき姿ころ今は憂き身の我つまや我戀人と手を取りて目當なければ心せき月をも待たすたどり行く

朱雀の大路宵なれば行きかふ車音絶えて二條三條人繁し知らぬ者にも憚かれは綾の小路に行ふはやと夜目に見えねと折れ行けば人も折よくみふ通照らす火影

もかすかなる心大宮横されは足もやうく地に付きて手さへまつかと取り直し
夜風覺ゆる堀川も添ふてあゆめはうきか中ならぬむかしにまさりしと西か東の
洞院も願りみもせず一筋に京のはつれの京極を過ぎてやうく町の外はつと息
つき佇めり

綾子 やうく町を出てたれとこれよりどこへ行たものう

綾子 心細うござりまするなあ

闇を穿ちて唯一つ村か火影は人や住む人を遁れて來たれども人に離れぬ習とて
人のなけれはうらさひし人ある方に急かんと三足五足寄り行けは風もあけれと
消ゆる火の跡は戀より尙暗き闇に光の戀人の顔も見えぬかいつくぞやこゝにこ
ゝにとすがりつき歩みもやらぬ甲斐なさよ

野邊の千草に影法師うれしや月と見かへれば東の山のいたゞきをいつか離れて
はるくど大路小路を打越して野にも森にも照り渡り尙行先に關となる藪も隠
さぬ西山は今宵の月の宿りうやわれも宿らんああたへと身をつくろうて先立て
は

綾子 まあ待て下さりませ

綾子 うなたはどうぞまやつたか

綾子 馴れぬ事とて殊の外足が痛てなりませぬ

綾子 こりや困つた事じやあ

綾子 ほんに昔はかりうめの花見遊山も輿車多くの者にかしつかれ庭へも獨
りは下りなんだに思もよらぬ真夜中に供をもつれす此野路

綾子 さぞ悔やしうござるうなあ

綾子 あれまたあんな悪い事

うもやふたりが戀中はさのふけふかやこどの春あゝの殿上の淵醉にまみえうめた
る臙夜は十五と七のおぼこ氣にはかどりかねてあかつきの鐘を其場のなかだち
と後の恨を喜ひし夢のはじめのうれしさは

綾子 思ひ出してはかり居るわいな

綾子 うりや我とても同じ事

逢瀬少き吉野川渡らぬ中に雲井より吹き來る風に奪はれてあれあの月の中に咲

く桂の花と見る事かど氣つかへは増すおもひ

維盛　よくく深きえにしぞや

いづくまでもいつまでもかくころわれとすがり寄り見かはせは雲隠れ月に代り

てはらくと降る雨にオ、うれよ

維盛　嵯峨の奥に知る人あり一先つかしこへ落行かん

いざこあたへと草を分けもすう濡らして走り行く

鐘の音

あなたより佛尼の姿にて出つ

こなたより文覺法師姿にて出つ

鬨争

雨折々

月出つ

佛　　今のはどうやら

維盛綾姫入る

文覺　南無阿彌陀

第四段

其一 鹿か谷 俊寛の山莊

基房 静憲 法印 成親 成經

西光 式部 大輔 章綱 平判官 康頼 俊寛 列坐

基房 積り積りし五月雨の
 成親 雲に隠れて月もなく
 成經 わつか晴間の静かさは
 章綱 谷に落入る瀧はかり
 俊寛 人里遠き此山莊
 康頼 密談には最屈竟
 静憲 我君にも御幸の仰されど万一途中にて人目に觸れなは御大事とお止め
 西光 申せし其代り某に評議の模様見て參れとの御詔でござる
 いかにか方々我君の御意といひ日にくく積る鬱憤にいつまで時を待つへ

成親 成親
 静憲 静憲
 基房 基房
 俊寛 俊寛
 西光 西光
 章綱 章綱
 康頼 康頼
 成經 成經

きう一日延せは一日とつゝのる平家の悪行は關白殿下に不禮の振舞こゝ
 に至て極れり某折しも通りかゝり目のあたり見るくやしき最早猶豫な
 り難し今宵は確かに事を擧ぐる計を定め申さん
 げに西光の云はるゝ如く傍若無人の平家の振舞官位俸祿我物顔
 君臣の禮を思はず朝威を侮とる傲慢不禮
 關白とは唯名ばかりよろつ平家の心のまゝ
 小面憎きは禿童平家の事少しにても悪しざまにいふものあれはからめ
 取るのみならず手に任せて家財を奪ふ見るに見兼て我家臣竹王が救は
 んど中に入りしに捕へられ我にも告げず殺せし由
 ろの立札より起りし事か某余り胸悪るさにわざと門前に立てたりしか
 罪もなき町人共貴殿の御家來まで失いせし意外でござる
 有る事無い事種として
 民を苦しむ非義非道
 聞けば大納言時忠の平家の一族にてなき者は人非人なりと申せし由

西光

數え擧げない限りわらし余の事聞くより已が身に皆うれれぞれの恨みあらん我等はかりか天か下同し恨を抱く者いくはくあるや計られず殊に源氏の人々の見るも哀れの其有様家の嫡統頼朝の伊豆の浦回の海士に落ち帯刀先生義賢の忘れ形見駒王は木曾の山家に山がつの中に交わる憂き姿頼政獨り三位とはいへ都の土に埋れ木のよりの花見る口惜しささこそと思ひやられたり我等一度事を起さなかなたこなたに山彦の響起るに疑なし

成親

何さま殊に藏人行綱彼の正しく多田の満仲第七代の後胤なり兼て語らひ置きたるか何とて今に見えさるか

行綱出つ

行綱

唯今うれへ参るでござろう

成親

藏人殿待兼たりかねてお話し申せし如くいよ、事を擧ぐるに就ては我一方の大將と改めてお頼み申す

行綱

身不肖なれと源家の一人願ふてもお頼み急度領承仕る

成親

此事仕をはせたる上は國をも庄をも御所望次第先つ弓袋の料として白布五十反まゐらせたし

行綱

辱けなき御賜物厚く御禮申しまする

章綱

して事起す

康頼

其次第は

西光

恰もよきは山門の大衆共が日頃の騒ぎ前の坐主を取止めしを君殊の外御逆鱗此由知らぬものなればいよ、山攻めとふれまいし不意にかはつて西八條へ攻め寄せてい如何でござる

俊寛

こは面白き計拙者同意仕る

成親

まかし藏人殿の御意見い

行綱

何さまそれもようござろうまかし味方の軍兵はすべて何程ござりまするな

成親

それは兼て催はし置き物の具も用意して諸事整ひ居りまするまかし人数は略何程

行綱

成親

行綱

西光

それは今分り申さぬ
容易からぬ大敵なれば大方の事にては
いや軍の數によるものかは彼いか程多勢なりとも鎮西八郎悪源太にか
けちらされしへろく武者何の恐るゝ事あらん闇をたよりに攻めよせ
て火を放たは狼狽し亂れ崩るに疑なし

成親

行綱

藏人殿いかゞござる
いかにもそれはようござる併し彼方は以前より幾倍となく増しまし
たそ

西光

行綱

増せいとて用ひねは何の役に立ちませうや
併し大事に大事を取て拙者は一先所領へ歸り一家の者共語らひますれ
は暫くお待ち下さるべし

西光

いやべんく〜と待たれようや左程氣つかいめさるなら御邊はあとにつ
いてござれ

成親

いや藏人殿には先陣を頼まふと思ふたに

西光

行綱

西光

行綱

成親

基房

静憲

基房

俊寛

章綱

康頼

成親

行綱

先陣は猛虎の如く炎の中へも飛て入る勇士ならではかなはぬて
すりや某を卑怯といはるか
勇士は後を見ぬものじや
何と
これはく〜どうしたものの評議はきめずに無用の争
まつ静まつて余人の意見も
聞て見るがようござる
各々所存はいかゞじやな
某は西光殿の御意見に同意致す所詮人數は及はねは短兵急に攻め寄せ
て意表に出るが第一なり
拙者も同意
致すでござる
藏人殿は
各々か左程まで仰せあれは是非がござらぬ

行綱
盛國
それ故何とそ今一度お取次下さるべし
然らぬ左様申上げん

浄海盛國侍臣出つ

浄海
行綱
家の大事とは何事あるや
未たお聞きあされませぬか院中の人々が此程より物の具整へ軍兵を催
さるゝ事

浄海
行綱
その山攻めの爲でないか
當家を攻めん爲めでござる
なんと
既に前刻俊寛僧都が鹿か谷の山庄にて一味の人々會合なし

浄海
行綱
一味とは誰々じや
關白殿下新大納言父子西光俊寛章綱康頼其外北面の侍共あまた與力致
してござる

浄海
シテ御邊はいかにして其事を知つたるぞ

行綱
某にも一方の大將となるへしと成親卿のお頼みなりしが今御盛の御當

浄海
院にも此事御承知か
家に何條刃を向けませうや即ち密にお知らせ申す

行綱
勿論の事でござる既に成親卿が軍兵を催されし其折も院宣ありとて召
されたり前刻も静憲法印御代理として列席あり西光法師が人も無げに
山攻と披露なし不意に代つて御當家を短兵急に攻め寄せんと評議一決
致してござる

浄海
ヤア盛國一門の侍兵早く呼へ呼へ

盛國
ハア——
入る

浄海
家貞はあるか家貞家貞

家貞出つ

浄海
汝院の御所へ参り大膳大夫を呼出して關白殿下新大納言其外近習の人
々に我一門を亡はして天下亂らんとする企あり一々搦め取り申すへし
君にも知ろしめさるゝかと急度言上して参れ

家貞 かしこまつてござりまする

入る

浄海 景家はあるか景家はあるか

景家出つ

浄海 當家傾けんとする謀反の輩京中に充ち満ちたるを一々に搦め取れ
景家 して其者共の姓名の

行綱こそ〜入る

浄海 ヤアいつの間にやら行綱め暇も乞はすいにつたよい〜まつ新大納

景家 ハ、

浄海 一方には西光俊寛章綱康頼一人も残さず召取りまゐれ

景家 かしこまつてござりまする

入る

経遠兼康其外侍大勢出つ

経遠 けしからぬ義に

皆 ござりまする

浄海

憎むへき奴原ならずや當家傾けうかんど、は言語道斷の去れものめ一
門はまだ寄らぬか謀反の輩召取り來らば我面前に引出せ一々面を踏
くれむ

其三 西光館 門前

西光馬にて出つ

西光

いつくより顯われしか一味の人々捕へんとて手くはりなせしと下來の
知らせ我身の上に迫つたり猶豫ならず院の御所へ急いでこれよりはせ
まゐらん

景家侍大勢出つ

景家

ヤア〜いつくへ西八條殿よりお召しでござる

西光

いやこれは奏すへき事あつて院の御所へ參るもの歸て後に西八條

景家

それ

馬より引下す 争ふ 遂に捕はる

侍大勢並居る

成親從者出つ

成親

急の使は山攻を宥めくれどの頼みならんおん憤り深ければ如何にして
かなふへきやこはおびたしい軍兵共

侍見て取巻く

成親

これは

一侍

我君の仰でござる(引張て入る)

從者逃げ去る

西光を縛して景家侍出つ

景家

西光法師召取りまゐつてござりまする

淨海盛國經遠兼康其他侍出つ

淨海

かに西光僧づくき法師め面をける蚊とんぼ如き身を以て當家傾けふな
んどは——有りのまゝに白狀せい

西光

目もあり耳もあるからは御邊等の振舞を見もすれば院中の企を聞きも
する口出しせぬとも申すまじいかにも聞た口も出した

淨海

エイ落付顔の胸惡さおのれ等如き下郎のはて召使はるゝだに有り難さ
に寵に誘て讒奏なし謀叛の企言語道斷

西光

人を下臈と云はるゝが御邊も元より上臈か

淨海

なんと

西光

御邊の父は刑部卿殿上の交すら嫌われし忠盛殿御邊は嫡子といひなか
ら十四五までい出仕もせず中御門家に立入て梵の直垂繩緒の足駄京童
か指さしてあの高平太と笑ひしかは扇にて顔隠し骨のすきより鼻出し
て間道を行かれしをまた鼻平太とあざわらへりそれよりいつの事なり
しか海賊少し召取り玉ひ四位兵衛佐になられしを人の過分と云合ひし
か思ひきや唯今は昇り昇つて上もあき太政大臣となり玉ふ雲に生れし
顔しても我目にい高平太鼻平太か衣装つけ冠着ても猿は猿
しやつ口裂け

淨海

西光

裂かひ裂け斬らは斬れ頭は飛て地に落つるも此魂は汝等の悪行罪過數
え立て天神地祇に訴へるぞ

浄海

エイ~~~~~ どうしてくりやう打て打て打て

侍打つ

西光

汝等如きに争ひぬ身よりも早く首を打て

浄海

いや~~~~こやつ左右なく斬るな厳しく拷問なして後川原へ引出し素頭
刎ねよ

景家

ハツ歩め

西光を引立て、入る

浄海

成親を引出せ

入る

経遠

ハツ

成親経遠出つ

浄海

暫く睨む御邊はそれでも人じやな

成親

エ

浄海

そも~~~~御邊は平治の時既に誅すへきはつなりしか身に代へて内府か

成親

諫め否み難くて免せしなり其恩義を打忘れ何恨あつて我家を傾けんと
いせらるゝそ人の人たるの恩知る故恩知らぬの畜生じや
全く唇は存じ申さす何者の讒言にや

浄海

いふな成親行綱の訴人西光の白状にて事は残らず知れ居るぞ

成親

エイ

浄海

経遠兼康さやつも打て打て

二人

ハツ~~~~併し小松殿の思召も~~~~

浄海

ヤア内府を恐れて我命を其方共の用ひぬか
左様ではござりませぬ

二人

成親に近きさゝやく 打つまねする 成親わざと叫ぶ

浄海

よし~~~~あなたの一間に押込め置け

二人

ハツ(成親を引立て、入る)

浄海

いかに盛國承はれ我一門はいにしへより源氏と共に武を司どり君に敵
たふ奴原を討平らけて幾歳か殊に此浄海は第一に保元の時一族半新院

の御方に参りしのみならず一の宮御事は亡父の養君にてましませはかたゞ與方あすへきを故院の御遺誠を重して君の御方に参りたり次に平治に信賴義朝大内に立籠り暗闇の世となせし時我一手にて平らけたり近くは經宗維方が君の御意に背きしも御爲に召取て殊に日頃のお望みある今上の御即位我助力にてかあふたり一方ならぬ御奉公恩賞は七代まで及ても過ぎざるにまれものどもが申す事お用ひあつて故もなく亡はさんとい余りならずや此上は鳥羽の御所か遙かに遠き鎮西へ移しまゐらす所存なり定めて北面の者共が矢一つ二つ射るである用意せよと侍共に其方より申付けい院の奉公思切つた馬に鞍置けさせあか取出せ一族これへ呼び出せ

盛國

ハア

宗盛知盛重衡貞能經遠兼康其外一門の侍甲冑にて出つ

宗盛

御諛に従ひ何者なりとも

知盛

何時なりとも攻めよする

重衡

用意整ひ

一同

ましてござる

淨海

オ、東の方に馬向けよ

一同

ハア 行きかける

重盛出つ 皆遂巡

宗盛

(遮り)いやちに兄上これほどの御大事に軍兵一人も召しつれ玉はず甲冑も着用なきは

重盛

大事とは何が大事大事とい天下の事若し朝敵のあるならばその時こそ甲冑着けん今い些細の私事汝等誰に向て其いでたち

宗盛

ハッ

重盛淨海の前に坐す 一同黙

淨海

いやなに重盛西光成親等か謀反はほんの枝葉君の御意こそ亂れの根元今の内に斷ち切て鳥羽へ移しまゐらす所存じやが御身の何と思やるそ

重盛泣く 一同黙

重盛

ア御運も末にありましたなあ——熟ら御有様を見まするに昔を忘れ道を思ひす恐れなから我慢の極りよつく御聞き下さりませかたしけなくも我家は桓武天皇の後胤なから中頃までは官途も低く平將軍の大功すら僅に受領に過ぎ申さず刑部卿殿得長壽院造進の御勸賞に内の昇殿を許されしも人は目ざましく思ひしとか然るに今父上は太政大臣にまて昇り玉ひ此重盛の愚昧の身すら大臣大將を辱ふし其外一家一門の官位俸祿いくはくそや同じ武門の源氏を見れば保元に六條判官平治に左馬頭討たれてより今は偏土に散て影なしこれ何故と思召す彼等が武勇劣るに非す我等の智略優るに非す皆運命のかげひなた與力なしたる大君の余光によりて我々はかく耀くとは思召さぬか翌さへ知れぬ雲の行衛謹みても尙謹むへきに傍若無人の日頃の振舞今又君を移さんとは我より否運を呼ひ玉ふか類稀なる君恩を打忘れ玉ひしか謀反既に現はれて一味の者共召取る上は至當の罪科行ふて事の由を陳し玉ひいよ——君を敬ひてます——民を憐れれまは神明佛佗も光を垂れ運命長く曇るま

九十二

しそれとも御心ひるかへさす飽くまで院を攻めんとならば重盛大臣大將なり朝敵拂ふ職分あれはこれより御所へ参るべし思ひ當るの保元に義朝は父に弓ひき遂に父の首討たり勅命とは申しなら大逆無道の至りそと空恐ろしく思ひしに淺ましや今日は我身の上に迫りしか——ア君を守れば孝あらす父に従へは忠ならず重盛進退谷まりました——所詮院へも参るべからすまた御供をも致すへからす唯重盛か此首を侍一人に仰付けられ先つ打て捨てらるべしこれより外に道はござらぬ

皆泣く

知盛

頼み切たる兄上が斯くまで仰せあるからは

貞能

何とそ一たひ御思案を御改め下さるやう

皆

我々一同お願ひ申上げます

浄海

悪黨共か申す事稍もすれはお用ひあれは如何なる事にならんも知れす

重盛

と思ふ故に此企まかし内府か左程まで止むれば是非もなし
すりやお止まり下さりますか

九十三

浄海
重盛

オ、

かくてこそ臣の道それがしの道も立つ次にかの成親卿は正しく君の寵臣なれば手荒き事も致されすかくいへはとて某が由縁ある故にはあらず皆君の爲家の爲朝敵ならぬ私の敵に酷さも後めたし君の思召も候はんまして子孫の末を思へは勉めても情をかけ慈悲を積むこそ肝要なれば保元に左府か屍堀り出したる信西は平治に其身も堀り出されたり報の程の恐ろしさかれを思ひこれを計りかたくお止まり下さりませ

浄海

フム——これも思止めるであらう

重盛

それ貞能成親卿をいたはり申せ

貞能

ハッ

入る

重盛

さらは某は立歸らん返へすくも院參は

浄海

フム
お止まりなされまするか

浄海答へす

重盛(左右を顧み)皆の者も聞きしならん強て御供せんとならば重盛か此首の刎ねらるゝを見てから行け

一同

ハア——

重盛立上る 浄海と顔見合す 考へなから入る

其五 重盛館

麻子

麻子出つ

夢か虚か此騒動兄上様が御謀反とは夢でなくは虚じやくとは思へども若しひよつと誠ではあるまいかどうある事であろうあわこんな時維盛か資盛が居たからちつとは心強いのに一人は家出一人は勘當——エイもう堪忍してやつたがよいむつかしい御氣質故さつぱり妾は分らぬわいなあ

重盛出つ

麻子

オ、お歸りでござりまするか

麻子 して兄上は

重盛 命乞してまゐつた

麻子 やつぱり虚でござりましたか

重盛 虚とは何が

麻子 兄上の謀叛とは

重盛 虚でない大眞實

麻子 エイ

重盛 御身も夢が醒めたかな

麻子 まだ夢の様でござりまする

重盛 盛國をこれへ呼へ

麻子 ハッ

盛國出つ

盛國 お召しにござりまするか

入る

重盛

其方これよりかけまはり此重盛こそ天下の大事を聞出したれ我を我と思はんものは物の具して急きまゐれと所々に傳へて来るへし

盛國 ハ、かしこまりましたござりまする

重盛 ア悪例も用ひねはならぬわい

入る

其六 淨海館 中門

侍大勢出つ

經遠 小松殿の御諫言にて暫く事は納つたか

兼康 侍共をお歸しなきはまた院參の仰せわらんも計り難いではござらぬか

家貞 拙者も左様存するか其時には何となさるゝ

景家 されは困つた事でござる

盛國出つ

盛國 ヤア、方々よく聞かれよ小松殿の仰でござる

家貞 なに小松殿の

一同

仰どな

盛國

いかにも殿の仰には天下の大事を聞出したれば物の具して早参れといつに赤いおんいそぎ

家貞

容易には騒ぎ玉はぬ小松殿の御催促

景家

まことに仔細ある事ならん

兼康

こりや急きまゐらすは

一同

なりませぬな

浄海出つ

浄海

ヤア〜者共いつれへ行く

皆聞かぬまねして入る

浄海

こりや〜者共エイ聞かぬとは不届奴誰ぞ来い〜

侍女出つ

浄海

侍共をこれへ呼へ

侍女

侍衆は皆急いて小松様へ参りまして私共はかり残りましてござります

る

浄海

なに皆小松へ参つたとか

侍女

御意にござりまする

浄海

何故内府は呼取るにや——若しやこへ攻寄する——

貞能出つ

浄海

オ、貞能何故あつて内府には侍共を呼寄するぞ

貞能

余の義ではござりませぬ御院参ある由を仙洞聞こし召し及はれ官位といひ俸祿といひ先例に秀てたれば深く朝恩を存すべきに却て國家を亂さんとは輕からぬ朝敵あり速に追討せよと院宣を下されましたが父に向て弓引く事いかにしてもあるべからずさりながら勅定もまた背き難うござりますれば此事殿の聞こし召し若し御自害もやあらんかと某に守護の命仰せ付けられましたしてござる
そりやまことか
何條虚言を申しませう

貞能

浄海

淨海

いやくく攻め寄するなら寄せ來れ余命少なき此淨海引受けて死す

貞能

某の守護の命受けて参りましたれば別の御使お立て下され

淨海

守護なんどい不禮なり入らぬ入らぬ淨海一人門を開て待受け居るそ

貞能

エ
立て立て立て早歸れ

淨海

ハア

入る

其七 重盛館

侍續々出つ

家貞

お召しに従ひ筑後守家貞

景家

飛彈守景家

兼康

妹尾太郎兼康

經遠

難波次郎經遠

一同

其外一同參上仕つてござりまする

重盛出つ

重盛

えて總數はいくはくわるや

盛國

洛中は申すに及はず

一侍

白河

二侍

大原

三侍

芹生の里

四侍

加茂

五侍

鞍馬

六侍

嵯峨

七侍

太秦

八侍

梅津

九侍

桂

十侍

淀

十一侍 岡の屋
 十二侍 宇治
 十三侍 醍醐
 十四侍 日野
 十五侍 小栗栖
 盛國 我も我もとはせまゐり
 十六侍 若年なれの真先かけ
 十七侍 老たりとて止まらず
 十八侍 鎧着て甲なく
 十九侍 弓持て矢持たす
 廿一侍 馬に鞍置く間も遅しと
 廿二侍 出家遁世の入道まで
 盛國 かけつけましてござりますれば總數二万五千騎はかり着到致してござりまする

貞能出つ

貞能 立歸りましてござりまする
 重盛 あなたの様子は如何なるぞ
 貞能 入道殿の仰せも聞かす皆々これへ参りましたれの残る者は青女房祐筆
 重盛 はかりにござりまする
 貞能 して父上の何といはれた
 重盛 仰の如く申上けしに中々ひるみし御様子なく攻め寄するから寄せ來れ
 重盛 門を開て待受けると以ての外の御景色
 重盛 フム——いやかに者共これへ寄れ日頃の契約違へずして早速にはせ來りし事かへすくも神妙なり重盛今朝天下の大事を聞出したる故呼寄せしが後聞糺せのあやまりなりしされはけふは立歸れさりながらこれに馴れ此後またも呼寄す時決して遲滞してはあらぬぞ
 家貞 我君の御仰せ
 景家 何條違背致しませう

兼康

いつにても此の如く

經遠

參上致す

一同

ござりまする

重盛

オ、重盛過分に思ふぞよ

盛國

さらはこれにて

一同

下りまする

重盛

貞能

貞能の外皆入る

重盛

ハッ

貞能

今一度西八條へ

重盛

して御口上の趣は

重盛

院宣の義のよき様に此方にて計らひますれの先つ今日は心安く思召さ

貞能

れ候へどよく〜申傳へてくれ

重盛

かしてましましてござりまする
入る
恨みもせず歸りたる侍共に引へかて飽くまで我慢の入道殿またいか

麻子

重盛

ようの悪行を企て玉ふも計られす不道の人も我父上何とて刃を向けられん諫めても止まらず却てつもの暴逆のはては一門一家の滅亡救はんとしても救はれず一年つゝに落ちて行く其有様が見られんや不忠不孝の其上に子孫に不慈の此重盛かくも命ながらへて世と諸共に浮き沈み但し世を捨て遁れんか身は遁れても此心忘るゝ暇あるへさかア是非善惡に迷ふたわい——祈るゝ熊野大權現何とぞ我父入道の我慢の心合らけて君万民を安んし玉へ——とても此事かなはずは先つ此重盛の命縮め玉へ偏に願ひ奉る

麻子出つ

ヤア我つまの後から赤い光が立ちました
ア是非もさき運命じやなわ

第五段

其一 夢の高殿

さなきだに限りある身を我と我命縮めて長き夜の眠り待つ身に夢惜しむ枕も今
の無益やと捨てゝ居明す曉の空つくくくと眺むれば西か東かいつしかにうつゝ
ともかく迷ひ行くおとましの我身やな

重盛出つ

重盛 こゝはいづくの國なるか

見渡せり遠近の山は霞に浮かされて幾重たなひく横雲の中に消え入る鳥の聲野
にの菜の花蓮華草梅と櫻の中抜けて柳に移す花の香の使の輕き蝶の羽送る風さ
へそよよと吹きも亂さす立つ烟春かと思はれはこなたにはあやめに並ふかさつ
ばた中に入りたき姫百合の野末は遙か青々と波立つ上を白鷺の影僅かなる日の
光染み入る蟬を夏ならむこなたは秋か女郎花萩もこぼさぬ眞盛りは菊に耻ちて
か赤らみし楓洩れ來る鹿の聲虫も弱るや冬の野のころもは雪の裾模様池の鴛鴦

美しと姑らく眺め入りにけり

重盛 あれくゝ俄に高殿が

こがねの屋根にしるかねの柱障子は瑠璃琥珀手すり珊瑚さざはしの馬腦を踏
て下り上る

重盛 あるとは誰を何人ぞ

折から獨り上臈の顔は小笠に隠せともうさは隠さぬ旅衣やつればてたる姿にて
歩みなやみて來りける

女出つ

重盛 これ少し物問はふこゝは誰の館ぞや

云へは女はさめくゝと暫く泣て居たりしが稍あつて顔を上げ

女 語るもつらきいにしへの

春暖かき我館妹春の夢を引裂きてつまは鬼住む離れ鳴我は日かげもかすかなる
深山の奥や風荒き浦回に逐はれ逐はるゝも指折り見れば幾とせやいつか再たひ
鴛鴦の寄添ふ事もなさけなや戀しき人はわたつみの藻くづとなりて残る身を尙

もさいなむかたきこそ

女 此館のあるじなれ

其名をいふも口惜しと横目に睨むて走り行く

女入る

またもこなたへ亂髪の翁と見れど年知れぬ命淺まし骨にのみ残る姿を衣さへ破れ引裂け色さめて此世のものと見えざるに此世の重荷尙負ふて杖にすがりてたどり來る

翁出つ

重盛 御身はこゝの領地のものか

問へは齒もなき口をまめ色赤き眼見開きて

翁 領地の者とは恨めしや

領地の主と諸人に仰かれたるも五十年残る命を月や花花より月よりいとし子に送らんものと譲りたる弓矢も太刀も打落し撫てつさすりついつくしむ手を斬り首もむごたらしう

翁 勿ねたるはこのあるじ

せめて一打うちたやと杖上げかけてよろよろ陰打ちさへもかなはぬかどなまなか残る血の涙拂てあなたへ過て行く

翁入る

ついでに來るは草刈童背よりも高き籠負ふて歩み苦しき其風情

童二人出つ

重盛 これく童餘り荷か勝つような少しつゝにしたがよい

一童 此人が何を云はんすこれだけ運むで行てさへ

二童 けふの暮しがむつかしい

重盛 ませた事をいふやつじやのう

一童 ませるにもませぬにも物を食はねは活きて居られぬ

重盛 それは父母があるうがな

二童 父は一日野働き

一童 母は夜も機織て

二童 それでも中々過せぬわいな

重盛 そりやまたなせじや

一章 取立てが酷い故

重盛 あんど

春は來れども花も見す夏は照る日に燒き焦され秋の野分をよう／＼どのがれて
冬を凌かんと納めるは上の藏其身も馬と使はれて

二章 ほんに水も飲まれぬわいな

重盛 去てまた誰の領分じや

一章 誰とて外にあらうか

二章 日本中を分け取りして

一章 自分はこのな家に住む

二人 平家じや平家じや平家じやわいなわ

忽ち天地闇となり時々裂けて稻妻のあかさ方より鳴る音は雷かと聞けば雷なら
す飛び來る風に落る雨風雨に乗て牛鬼馬鬼猛火燃へ立つ火の車此方目かけて引
き來る

鬼出つ

(消ゆ)

- 一鬼 時節來れり運命盡きたり
- 二鬼 入道いつくそ疾く／＼出てよ
- 三鬼 一族残らず出てよ出てよ
- 四鬼 まつ此縮打碎け
- 五鬼 障子蹴破れ柱折れ
- 六鬼 天井碎き屋根微塵
- 七鬼 幾百人の涙の種
- 八鬼 幾千人の怒の的
- 九鬼 幾万人の恨の根元
- 一鬼 いしす之餘さす吹散せ
- 二鬼 五十年の事業の塊
- 三鬼 唯一時に打碎き
- 四鬼 彼等の我慢をあざ笑へ
- 五鬼 彼等の罪惡數之よや

- 六鬼 彼等は人の汗絞れり
- 七鬼 彼等の汗を絞るへし
- 八鬼 彼等は人の皮剥きたり
- 九鬼 彼等の皮を剥けや剥け
- 一鬼 彼等は人の血を吸へり
- 二鬼 彼等の血汐を吸へや吸へ
- 三鬼 彼等は人を沈めたり
- 四鬼 彼等に水を食はせよ
- 五鬼 彼等は人を焼き焦せり
- 六鬼 彼等を烈火に投こめよ
- 七鬼 彼等か枯せし骨はいくはく
- 八鬼 彼等の骨にて森作れ
- 九鬼 彼等か刎ねたる首はいくはく
- 一鬼 彼等の首にて山築け

- 二鬼 ちぎ〜出てよ出ですんは
 - 三鬼 片つ端から引づり出し
 - 四鬼 此火の車にて連行かん
 - 五鬼 先つ入道より引づり出せ
- さしも巧を盡したる高殿塵となる中より父入道を引出し炎渦巻く其中へ投込め
 ゐくれ赤るの光と共に鬼も消え跡にの白きしやれかうべ數限りかく積み重り山
 なすの唯々と寄らんとすれいふしまるび共に埋る其跡に笹輪藤の旗高く掲げて
 源家現れたり

頼朝侍大勢出つ

頼朝 二十年の其間堪へ忍ひたる甲斐あつて今日唯今入道の首級手に入るう
 れしさよ平家残らす討亡はしこれより源家の天下なり者共かちどき

一同凱歌

頼朝 入道の首木にかけよ
 一侍 ハア(梟首す)

頼朝 はてこゝちよき有様じやなあ
喜ぶ聲に悲しみて見れば夢とぞなりにける

其二 燈籠堂

重盛夢醒む 貞能侍坐

貞能 我君

重盛 貞能か

貞能 ひどう御苦痛にござりまするか

重盛 そちや何も見さりしか

貞能 それはまたいかやうある

重盛 地獄の鬼の火の車

貞能 エ

重盛 一家一門燭體の山

貞能 それはお夢でござりまする

重盛 夢——いや夢でない未來の實相

貞能 えてそれはいかなる有様

重盛 いや語ても最早無益——併しかの頼朝は近頃何如なし居るそ

貞能 彼は矢張北條四郎時政方に居りまする

重盛 北條は平家の端されど先頃は源氏に附きたり

貞能 承はれば彼の娘私かに嫁せしと申す事

重盛 フム——東國は源氏の根本枯れても残る草原へ放ちたる虎は再び捕

ふる事はなり難し——思ひまはせはいと、尙心細き一門の成行くはて

は今の夢

貞能 エ

重盛 ア背の苦痛は數でないわい

侍出つ

侍 唯今西八條よりお使者として主馬の判官盛國殿見えましてござりまする

貞能 我君いかゞはからひませう

重盛 これへ通せ

侍 ハッ

盛國出つ

入る

貞能 これはく判官殿お使御苦勞に存しまする

重盛 盛國か近う參れ

盛國 ハッ

貞能 えてお使の趣は

盛國 さればでござる君には日にく御いたはり重らせ玉ふと承はり大殿に

も殊のう御配慮何とて今まで療養のはからひはあき事にや恰も此程唐

の國より目出度醫師の渡り居れば追つてそれへ參らすべしまつ此由を

傳へよと懇々仰でござりまする

貞能 此間より幾度かお願い申す醫療の義

盛國 拙者も何とそお聞きある様

二人 お願ひ申し上げまする

重盛 志はうれしいが所存あつて聞かれぬわい

貞能 エイ

盛國 折角殿の仰せなればせめてかの醫師にお目見得なりとお許しなされて

下さります

重盛 いやく我は大臣なり大臣の身にてありながら異國の客に見えん事我

に醫術のなきに似たり國の耻家の耻たどへ命を失なふとも國家の耻に

代へられす——さりながら其醫師に費を惜むと思はれんも快からぬ事

なれば貞能金子五百斤取出して與ふへし

貞能 ハッ

入る

盛國 承はれば此上に申し様なきおん仰せ

重盛 此由父に申上げよ先立ち行くはいたはしけれと例あき事にもあらず必

すお嘆き下さるなどよくくそちより傳へてくれ

貞能出つ

貞能
盛國

すきはち金子五百斤彼醫師にお渡し下され
たしかにお取次き致すでござろう

文覺追かけて維盛資盛出つ

貞能

ヤ、思ひがけなき若殿達

盛國

そりや何者でござりまする

維盛

案内もなく館にかけ入る

資盛

法師姿の怪しき曲者

維盛

捕へんとしても手強くして

資盛

思はすこゝまで参りました

文覺

いやわしは怪しい者ではないこゝの内に死ぬ人があると聞た故引導し

貞能

てやろうとわざくゝやつて來たのじやわい

盛國

いやこいつ忌はしい事をいひをるわい

貞能

見ればむさくろしい風をしてこゝをいつくと思ひをる大方汝氣違じや

盛國

な

文覺

そうじやわしは氣違じや

維盛

いや氣違のまねをして

資盛

入りこむ間者であらうがな

文覺

そうじやわしは間者じや

貞能

間者とあれは免されぬ

盛國

去ていつくよりの間者なるそ

文覺

地獄からの間者じやわい

盛國

何をいふやら矢張氣違ひ

貞能

不禮者めが下れ下れ

文覺

いゝや下らぬ下つたら死人か成佛出來ぬぞよ

貞能

憎つき賣僧め

盛國

若殿拙者等にお任せあれ

文覺

二人かゝる 争ふ 文覺遂に捕はる
ヤイ〜これは法師に繩かけたさ

貞能 オ、繩はかりか首も刎ねるぞ
 文覺 首を刎ねたらとむらひが出来まいが
 盛國 おのれの様な氣違坊主何の役に立つものか
 文覺 おれの様な氣違坊主じや故引導をしてやるのじや
 貞能 エイ何をいふやらたはいもない奴
 文覺 汝等には分らぬわ死人はどこじや早う見せい
 盛國 まだ申すか
 文覺 見に来たのじや故見せいと云ふのじや
 貞能 エイ面倒ないつそ一打刀を抜きかける
 重盛 法師これへ
 皆 エイ
 重盛 重盛お目にかゝるでござろう
 貞能 我君にはかゝる狂人
 重盛 其方共は控へて居れ

盛國 それじやと申して
 重盛 早ういましめお解き申せ
 貞能 ハア 繩を解く
 文覺(上坐に就て)案の上まだ成佛せぬな
 重盛 えていかにして引導めさる
 文覺 そうじや其胸先を一刀にぐつと突くのじや
 貞能 こいついよゝゝ怪しき曲者
 盛國 矢張間者でござりませう
 重盛 まてゝたどへ間者にもせよ刺客にもせよ表門より白晝に這入つて來
 文覺 れは此方も繩をもかけず太刀取らす逢てやらねはならぬわい
 重盛 成程こなたは大將じやな
 文覺 貴僧はまた法師にして何故塵を起さるゝ
 重盛 エ——いや引導渡すは法師の役じや
 併し變つた渡し方

文覺

何の變つた事かある千万卷の經文を續盡しても成佛出來ぬ因果かこなたの病でかい

重盛

すりや我病を承知あるか

文覺

脊と胸の腫物は裂て破るか第一じや

重盛

併し貴僧の裂き様は余り手荒うはござらぬか

文覺

それは腫物が大きい故

重盛

大なれはまた難しえて貴僧のお手際は

文覺

拙ない事を致そうか

重盛

然らばよろしくお頼み申す

文覺

あの拙僧にお頼みとな

重盛

いかにも

文覺

ウフ

重盛

ハ、

文覺

ウフ

重盛

ハ、

二人

ウフハ、、、

重盛

いやこれも不思議の縁でござろう

文覺

良縁か

重盛

悪縁か

文覺

敵か

重盛

味方か

文覺

重盛殿

重盛

文覺御坊

文覺

なんと

重盛

いやなに知らぬ御僧

文覺

お別れ申す

貞能

合點の行かぬ御問答

盛國

ありや何者でござりまする

入る

重盛 後に思合すであらう——いやかに兩人あれに居るは何者じや

貞能 ハッ

盛國 若殿達でござりまする

重盛 大罪ある二人の倅誰が許して立歸つた

維盛資盛 ハッ

重盛 免しを得へき功でも立てしか

維盛資盛 ハッ

重盛 功もなく許しもなく自儘に館に立歸るとは我を侮とる致し方——それへ出よ手討にする

貞能 エイ

盛國 これは思ひもよりませぬ

貞能 日頃に似ぬ無慈悲の御誼

盛國 たどひお免しなきまでもお手討とは余りの事

貞能 まつ——お止まり

二人 下さりませ

重盛 いや——止めるな憎つくき倅免し置かれぬ覺悟せよ

二人 そこそ何とぞ

二人止む 重盛拂て刀を取る 切り兼る

知盛出つ

知盛 暫く——父上よりの仰でござる暫くお止まり下さりませ

重盛 なに父上より

知盛 先つ——お止り下さりませ

重盛 刀を置きまして父上の仰とは

知盛 されは維盛の當家の嫡男然るにかく重病の折柄に豎居なしては掛念なり資盛も長の苦勞共々勘當赦免あれどの仰に我等一族も

貞能 我々臣下一同も

盛國 お願ひ申し上げます

重盛 切るが慈悲か免すが慈悲か悟らねは恨むべしア遁れ難なき一族の

皆

エ

重盛

いかにも勘當免すであらう

維盛

すりや御免し

資盛

下さりますか

維盛

有り難う

資盛

存じまする

重盛

左程までに嬉しいか

二人

ハッ

重盛涙に咽ふ

維盛

こりや何となされました

重盛

いやどうもあい——時に維盛再たひ家に入るからは妻なくてはかなふ

維盛

まじ唯今妻を迎ようそ

貞能

打て變つた此御機嫌兎に角お請けあされませ

維盛

それでもこなたに

重盛

いや余人でない故中御門成親卿の息女綾子の事

維盛

エイ

重盛

孤兒おれはいつまでもいたわつてやるがよい

維盛

ハア

知盛

丁度あなたに控へてござれば一寸これへ招きませう

貞能

御臺様にも久々にて御對面なされては

重盛

オ、久しく誰にも逢はざりしが今は許す皆呼へ呼へ

貞能

ハッ 入る

直に麻子綾子と出つ

麻子

我つまお久しうござりまする

重盛

そなたは堅固で目出たいのう

麻子

承はれは二人の子勘當お免しなされまして維盛は此綾子と添はしてお
やりなさるとやら有り難う存じまするそれ綾子これへ出てお目見得を

綾子

何と申してよい事やら唯々おうれしう存じまする

重盛

綾姫か幾久しう彼と苦樂を分け玉へ——それ皆の者に酒進めよ

貞能

ハッ(盃を出す)

重盛飲て維盛にさす 維盛受ける

重盛

維盛

重盛

ハッ

今云ふ事よく聞かれよ御身は人より家の嫡統遠からず世を繼ぎ玉はん
榮ゆるも衰ふるも先つ御身の上にかゝるべし必ず君に誠を盡し人を憐
れみしえたげずたとへ衰運に落行くとも決して非道をあし玉ふなさら
ぬだにかさかりし罪の報は重からんせめて誠の道を守りそれにて亡は
後悔あらじ——貞能彼に引出物を

貞能

ハッ(袋に入れたる太刀を出す)

維盛

こりや當家に傳はる小烏丸でござりまするか(袋をはつして)ヤ忌はしい
無蚊の太刀

重盛

いや貞能かあやまりからず日頃は父入道殿如何にもあり玉ふ其時に此
重盛が佩かんものと思ひ居りしが今却て重盛父に先立つ上は御身こそ
佩くへきなれ祖父の時父の時此刀を用ひ玉へ

皆泣く

重盛

最後の日影も消え失せたり最後の歌を唱はせよ最後の唱名致すであら
う

簾を下す 皆泣て入る

燈籠に火を点す

歌

こゝろの闇の深きをは

燈籠の火こそ照すなれ

彌陀の誓を頼む身は

照さぬ處はなかりけり

若き女六人つゝ銅鍬子を鳴して椽側を廻る

淨海宗盛知盛重衡麻子維盛綾子資盛
時忠貞能盛國家貞景家經遠兼康 出づ

淨海 重盛重盛
一同 内府様

簾を上げる

重盛中臺に坐して瞑目

淨海 重盛には
一同 早御最後

重盛少し目を開て復たふさぐ

畢

高安三郎作

遠藤武者 近刊

公 曉 近刊

眞田幸村 近刊

定價金三拾錢

明治二十九年九月十五日印刷
明治二十九年九月廿四日發行

東京市本郷區眞砂町三十番地

高安三郎

著作兼
發行者

東京市神田區雉子町卅四番地

宮本敦

印刷者

同所

宮本印刷所

印刷所